

上演 3

2024年7月31日3校目  
北海道ブロック

北海道帯広三条高等学校

「つぶあんとチーズ」

第48回全国高等学校総合文化祭  
第70回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

長野県岩村田高等学校

村上珠子

舞台は文化祭。後夜祭前に売上金を数える仕事をするナツミとモモカ。モモカは何度も転校を繰り返しており、友達を作らないと決意していた。グイグイと距離を詰めてくるナツミに対して、初めは頑なな態度だったが、少しずつ心を開き友情が芽生え始め、それはナツミの転校を知ってもなお揺るがないものになっていく。この二人の丁寧な会話劇を垣間見ながら、私たち観客も舞台と同じ時間を過ごしている感覚になり、彼女達の寂しさや友達ができた喜びが感じられた。

この作品のタイトルである「つぶあんとチーズ」にはナツミとモモカの二人の対比が込められているのではないかと。性格や服装、転校する側される側など相反する二人が「おやき」を共有することにより、心の距離が縮まり、ただの知り合いだった関係性がかけがえのない関係に変わっていく。この劇で描かれていた、対照的で普通なら平行線なままの2人が、友情が芽生えて行く過程が心に刺さりとても温かい気持ちになった。

モモカが今まで外すことがなかったマスクを外し、ナツミに寄り添う姿に「Let It Go」の「ありのままの姿を見せる」というフレーズが重なった。初めての友達と100人目の友達という特別な関係。お互い心を許すことができた2人の間に残された時間はわずかだが、離れてもこの関係が続いていくかのような結末だった。

音響が印象的でスマホの通知音や先生のパフォーマンスなど、まるで実際の媒体や場所から流れているかのようで、それがリアルさを引き立てていた。また、劇が進むにつれて照明がオレンジ色に変わっていき、夕焼けを彷彿とさせて印象的で時間経過が分かりやすかった。

講評委員の中には、それぞれに「転校」への思い入れがあった。一緒に過ごした貴重な時間への後悔や、離れてしまう不安、多くの思い出を作っておきたいもどかしい気持ちは、全国大会という短い時間を12人の仲間と共有している私たちにとって、とても共感できるものだった。かけがえのない今を大切にしたい、そう思える作品だった。

